

---

# 秘剣 もやのうち

津軽 あまに

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秘剣 もやのうち

### 【Nコード】

N03680

### 【作者名】

津軽 あまに

### 【あらすじ】

言葉を代償に力を発揮する秘剣「もやのうち」。

姉は弟のため、己を削って刀を振るう。

それは、初めて彼が自分のことを「姉」と呼んでくれた日。誓った。血など知らない。家柄など関係ない。ウチはこの子の本当の姉になるのだと。

だからか。見たこともないような蟲の前で、心は奇妙なほど冷静だった。

咆哮。突撃。降り注ぐ雨。

蔵の中に飛び込んで粘つく糸をやり過ごし、武器になるものを探す。

一振りの刀。奇妙な墨字で書かれた布で縛められた鞘。

古刀。銘は『靄之内』。

曰く、言の葉を業の刃に変える不思議な道具。

先祖……流派の開祖ともいう……が、鬼を斬ったなんて話が伝わる胡散臭い骨董だ。

とりなくこゑす　ゆめさませ  
みよあけわたる　ひんかしを  
そらいろはえて　おきつへに  
ほふねむれぬ　もやのうち

意味のわからないその文章を読み流し、布を一息で解いて柄に手をかける。

「お嬢。その剣はやめておけ。弟君ならともかく、オマエさんには使いこなせない。

うまく振るえたとして、それを使うほど、お前さんは大事なものを失っていく」

声が聞こえた。誰だか知らないが、ふざけた忠告だった。

これを、木刀もろくに振るえない弟に持たせる？ あのバケモノを相手にして？

節くれだった七の足。赤の鬣。四の瞳。膨れた胴はウチの下半身ほどはある。

眼前には、太平なる天下には不似合いな、百鬼夜行から抜け出たような非常識。

「冗談。弟を背負ってる以上、そこでの危険は姉ウチのものや」

「ならば止めぬよ。お嬢さん。願わくはお前さんの喪失が、安らかでありますように」

拍子抜けするほど簡単に、刃は抜き払われた。

この剣は最初から、獲物を望んでいたのだ。それが眼前の蟲がウチかは知らないが。

肉に、魂に、毒が流れ込む。

蟲の突撃が静止する。否。止まったわけではない。極端に速度が遅くなっただけの話。

いや、それすら間違い。速度は全く変わっていない。ただウチの認識が加速しただけ。

五感が研ぎ澄まされる。研磨とは磨耗に似る。

薄く。薄く。薄く。己を構成している要素が削られていく。

連想するのは研ぎ過ぎた刀。薄き鋭刃。汝、硬きが故に脆きもの。二十の齡をかけて積み上げてきた理性が警鐘を鳴らす。

これは夢だ。何かの間違いだ。目を閉じる。この練磨を拒絶せよ。目が覚めればいつもの朝。「何だ、夢か」などと呟きながら道場の掃除を始めるのだ。

「煩い……」

甘く平和な日常に縋るための命綱。苦く無慈悲な非日常の刃を封じる鎖。

想像し、斬れるはずだと己すら詐術にかけて両断する。

非日常で鍛えられた銀刃は、その幻想すら現創し、形無き理性の声すら殺してみせた。

世界と己との間の絶対的な温度差に、脳の各所が悲鳴を上げる。

今まで磨いてきた技とは違う。相手を効率的に屠るためだけの業が身に刻まれていく。

鍰が鳴く。己が銘を唱えよと。

「屠れ。『靄之内』」

鞘から解放されたる銀が黒い影を帯びる。

音もなく両断される蟲を見ながら。

ウチが失ったのは、『鳥鳴く声す』<sup>トリナクコエス</sup>、その世界。

ゆめさませ

みよあけわたる ひんかしを

そらいろはえて おきつへに

ほふねむれぬ もやのうち

雨の音色に、意識が浮きあがる。

悪い夢だ。魔剣片手に蟲のバケモノ退治。いくらウチの……が、

……だからって。

……切れた。意識に間ができた。ある当たり前の概念が、意識から消えていた。

自分の存在を識別しうるモノ。姓名のうち、姓の先の名称が意識から消滅していた。

徐々に頭が回りはじめる。意識が鈍い。まるで、ある重い枷をかけられたかのように。

眼前にあの刀。夢であればよかったのに。あれは現実。そう、その存在が告げている。

異形のバケモノ。それを切り伏せた自分。そういえば傍にいた野郎が何か言っていた。

『お嬢。その剣はやめておけ。オウ君らもかく、オマさんには使い　せない。

うま　振る　た　して、それを使うほ　、おマ　さんは大事　も　のをウシ　ってい　』

剣を振るうたび喪失がある。そう、ソイツは言ったのだ。

自分は、喪失している。しかし、消えたものは？

姓名の下の方だけ？　であれば大丈夫。姓で呼ばれば反応できる。

そつだ。鍛錬の用意をしよう。……のためにも、いい剣士の見本を見せねば。

……まただ。また、意識に間ができた。自分の名称が消えた以上の衝撃。

新しい母の連れてきたお餓鬼さま。十以上も下の兄弟。

その、正しい呼び方が、頭から消えた。

誓ったのに。自分は、彼の姉だって。血は違えど、本物の姉について。

かさ。

歯をかみ締めて、それを見る。

昨日の再現。七の脚。赤の鬣の蟲が、三匹。

三方から紡がれる固まった唾液、一瞬で縛めの壁にて逃げ場を絶たれる。

鞘の端を踏み、跳ね上げられた剣を抜いた。

柄を伝った刃の闇が己を削る。

夢だ。妄想だ。常識の警鐘を背後を一瞥して押し潰した。ウチが斬らねば後ろには、あの餓鬼がいる。

アレの前に立つ以上、あらゆる危険はウチのものだ。

「屠れ」

紡がれるのは剣の銘。

「『靄之内』！」

かくて奪われたる五つ文字の世界。

願わくは早よそがあしき『夢覚ませ』<sup>ユメサマセ</sup>。

みよあけわたる ひんかしを  
そらいろはえて おきつへに  
ほふねむれぬ もやのうち

鏢についていた布の文字は、四十八のうち十二が消えている。

磨かれた意識が後ろの気配を知る。

傾いた僧だった。

「おろいた。その齡いでそれだけの 剣の能 ヨ を使っている  
は」

「頼むから、ウチにわかるように会話してや」

その意味に気付いたか、野郎の表情が変わる。  
剣を手にし、封印の文字を見て、そいつは大きい息をついた。

「るほ。……失礼。あー、お嬢。ワシの言うのがわかるかね？」

「あ。普通に喋った」

「やは のう。文字に依存した喪失か。珍妙たる代償もあったものだ」

文字、それに関わる概念の喪失。

それが剣を振るう代価。そう、そいつは語った。

「お裨いで癒<sup>い</sup>えるのか？」

「んにや、無<sup>だ</sup>。あんたのそれは裨えれば消える呪詛ではない。ただの欠損じゃ」

頬の端を上げて、僧は剣を見た。

「その剣、兄弟に渡してしえ。狙われたのはあいつじゃ。あいつに元凶を断たろ」

「冗談……って、アンタは、あの蟲を知ってるんか？」

「うむ。うやら、あんたの下の兄弟は、あるバケモノに気にいられたらしい。」

アレは、その配下じゃ。親分を叩けば消えるだろう」

「アンタがやれや。悪鬼退治っていえば僧やろ」

「ははは。ワシのは衣装だけじゃ。信心の欠片もあるものか」

「それを威張るかっ！……兄弟<sup>アイツ</sup>を呼ぶ手は抜きや」

「あ聞け。あんたの兄弟ら、剣を振っても「代償」がいらんしたら？」

あんたが剣を使い続ければ、じきにあらる意識を文字で紡げん



ほ 消耗しきる。

それは、不便じゃろうが？」

あんたに通じる言い方を考えるだけで十分不便じゃが。そう、僧は笑った。

意識を文字で語る機能の喪失。簡単に言うが、それは不便の域で表現できる段階か？

多分それは生きつつも死に近い虚無。

それで？　ウチは？　剣を放って？　あいつに剣を押し付けて？

「でも、ウチはアイツの姉やしね。事件は、ウチだけのものや」

強い姉を演じきる。血の違いを笑って、本物たる。そう誓ったのだ。

僧はウチに紙を放った。

「親分はその寺だ。意識が靄の内に消えぬうちに斬れ」

夜の寺は密たる気配が満ち溢れる。

夜明けを否定した闇の結晶たる場。

鏢が吠える。

見よ、その潜みたる怨念を。そは相喰む腐の蟲壺たる。

それは視界に満ちたの蟲の群れ。

七脚の蟲達が道を開ける。獲物を迎え入れるように。

雲霞に似た異形を中心。

立つのは、少女だった。  
可愛らしい。袖から覗いた七の脚が見えねば。

「よう。アンタがウチのにちよっかいかけてる悪い蟲かい」  
「よ 来た、人間よ。 だ会話ができるほ には づれておら  
んだか」

見かけの齡に裏腹たる艶。それに怖気を呼ぶ腐臭を思う。  
本質からして相容れぬ。そう認定した。

「でだ。一応言うが。アイツはウチのものや。手を引け」  
「彼は妾等の繁栄をヤソ するミ。誰のものか いうらば妾  
らのたの血ミヤだ」  
「引かんつてわけかい？ 天下の平和に興味はねえ。他を当たれば  
見逃したるで」  
「そちら そ引かぬのか？ そもそもお主は彼 は他人であろうが」  
「ウチは姉で、アイツはウチのものや」

決裂。

九匹、八方から七脚のバケモノ。

剣を抜き、呪布を掴んで旋風の転。

吠える吼える咆える。飢えた獣が脳を駆ける。

それは死出への数え歌。

一 の概念が二の腕を伝い、未曾有の力に四肢が震える。  
いつもであれば無駄たる拳。死地にあつては致死的。  
丸の従者が跳ね襲う。

見える。四方八方十二界。

旋の剣が反応を、力を、意志を磨きあげる。磨き潰れる。  
もう自分には聞けぬ。『見よ明け渡る』の死地の文字。

ひんかしを  
そらいろはえて おきつへに  
ほふねむれぬ もやのうち

空喰む追手を刃で払う。  
屠れ屠れや脳の露。  
愚かの果ての狒々の儀式。  
刃、刃、刃にて蟲屠れ。  
ウチは脆い。敵は多い。  
彼我の違いは恐ろしい。  
でも。退かぬ。

「はは。帰れば大きい貸しやな」

眠れ怖おそ気に縮む「普通」。  
ウチはイキモノ？ 違う。その手はもう死にして一の刃。  
消えろ『朝日ヒンカシラを』想う炎。

そらいろはえて おきつへに  
ほふねむれぬ もやのうち

群れ払うは、鏢しほ音や、血色ちこや、濡れむ刃や。  
焼きつ斬られつ綺羅綺羅征きつ、そぞろに血濡れ紅染む手。

夜喰む不吉に群れは消え、気づきて敵は、はやもつ一。  
空の端に紅。黎の月。  
胸に来つ想い。ウチの家。屋根で摘む餅。揃いの紬。

「そろそろおねむや、鬼の王」

眠れ羅卒。『空色映えて』息尽きむや。

おきつへに  
ほふねむれみぬ もやのうち

熾つ火群れに突きの群れ。

眠れ絹生む群れの王。

『沖つへに』、無や負や露や、血も贅にやれ。

ほふねむれみぬ もやのうち

「屠れ……」

『もつ知の有無も露の内。  
帆船群れ居ぬ』……

もやのつち

「、のの?」

……夜の者討ち、もう、

「……モヤノウチ霽之内」

「誰?」

「ウチや」

「遅かったじゃない。心配、したんだよ」

「……飲も?」

「ん。おかえり、姉さん」

白の振袖朱に染めて。

今宵も月は、霽の内。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0368o/>

---

秘剣 もやのうち

2010年10月9日07時15分発行